

SADA

SAKAI DESIGN ASSOCIATION

堺デザイン協会

No.12

平成3年12月20日



阪堺電気軌道



SADA 講話と懇親のつどい

平成3年1月30日ホテル リバティープラザ ゴールドルームで、恒例SADA新春懇親会が開催されました。ゲストに財団法人 大阪日本民芸館理事・事務長 新居恒夫氏をお迎えして「民芸と私」をテーマにお話を伺いました。日本民芸館の運営面での御苦労から創始者柳宗悦さんの民芸に対する情熱など、興味深いエピソードの数々に参加の皆さんは熱心に耳を傾けました。続いて開催された、これまた恒例の懇親会では、久々に楽しい歓談のひと時を過ごしました。

■講演「民芸と私」

新居 恒夫

大阪日本民芸館の館長は、柳宗理と申します。インダストリアルデザイナーで、東京駒場の日本民芸館の館長であり、大阪日本民芸館の館長でもあるわけです。

大阪日本民芸館の沿革を紹介させていただきます。昭和45年3月15日から9月15日まで大阪千里丘陵で万国博覧会が催されたことは皆様よくご記憶にあると思います。昨年鶴見緑地で「緑の博覧会」が行なわれましたが、その規模の数倍の大きさで行なわれたわけです。千里の開催時は日本で初めての万国博覧会として入場者数は6ヶ月で6千万人と緑の博覧会の3倍もの方がお越しになりました。今はあの跡地の利用で公園になっておりますが、将来の跡地利用の構図を描いた時に、今民芸館のある一帯を文化施設ゾーンとして残そうと当初からの計画がありまして、日本民芸館がパビリオンの一つとして永久保存として残りました。昭和45年の開催でしたが、実は40年前後から「人類の進歩と調和」というテーマで博覧会を開こうと国の方からいろいろ音頭とりがありました。

東京駒場に昭和12年に柳宗悦さんがお建てになった日本民芸館というのがあります。柳宗悦さんは昭和36年にお亡くなりになりましたので昭和40年当時は益子で焼物をしておられた浜田庄司さんが館長でした。この浜田さんは焼物の世界でたいへんな足跡を残されておられますが、この万国博覧会の開催という世界の人々が注目するこの時期に日本の美というものを紹介しようじゃないかということを経験されて提案されたのです。

その時たまたま全国に民芸協会の組織がありまして、この大阪地区の民芸協会の会長をしていただいたのが倉敷レーヨンの大原総一郎さんでした。そのお父さんは大原孫三郎さんとおっしゃる方で、昭和11年に東京に民芸館が設立される時に民芸の主旨に賛同されて、当時で10万円というお金を寄付されました。関西の財界に呼び掛けられて、関西

の力で出展に協力しようと大原さんがヘッドとなって提唱されました。その時、倉敷レーヨンの他に16社が協賛して出展したわけです。しかし大原さんが万博の直前に亡くなったので、当時日本生命の社長でした広瀬さんにおハチが回ってまいりまして、日本生命が事務局をお引き受けして万博の開催を乗り切ったわけです。そんなことでその後大阪日本民芸館の事務局を日本生命がお引き受けいたしました。現在20年を経過しております。私もそういった関係で日本生命から日本民芸館の方に出向しております。

現在私共の運営の財団の母体は日本生命をはじめ17社の皆さんでこの民芸館の財団の役員を引き受けていただいております。まあいう館を維持していくのはなかなか大変でして、今私共の民芸館の支出規模は、年間6000万円ぐらいかかります。職員も私を含めて5、6人しかいないんですが、たいへん展示面積が広いですし、まあいう広いところを維持していくには光熱費などもいれますとたいへんなお金がかかります。その6000万円を賄う収入の財源ですが入館料は500万円ぐらいです。あそこは国有地で、お隣に国立美術館、国立民芸博物館があります。いずれも安い料金で沢山の方にお見せしようという主旨で生まれておりますから入館料は非常に押さえられております。

民芸館以外はみんな国立なんですけど、私共はプライベートな財団です。入館者数ということもありますが総支出の1割ぐらいしか入館料で賄えない…あとは何で賄っているかといいますと基本財産の果実です。それが年々の諸物価の高騰により今持っている基本財産ではとても賄えないというので、実は私12月から正月をとばしましてずっと毎日、企業訪問をしておりますご寄付をお願いにまわっている次第です。今回の寄付の目標は1億8000万円です。その内日本生命が1億円を出してくださるということであと他の16社の方に500万円ずつお願いするというかたちで今いろいろ努力をしておりますご返事をいただいているわけです。設立からそのほとんどが通常の運営費で使われておまして、蔵品を買うところまで余裕がない…というのが実体です。では展示会の作品はどこから持ってきているかと言いますと東京駒場の日本民芸館の逸品をたいへんな運送費と保険料を払いながら運んでまいりまして展示しております。私共の民芸館がスタートする時に、東京都とのお約束の契約書があります。今日まで東京の日本民芸館の支援によりまして運営されているというのが現状です。

実に人間の縁とは不思議なものだなァと感じます。私はもう日本生命に30年以上勤めております。生まれは神戸で関西学院大学の商学部出身ですので、簿記と会計だったら得意だったのですが、こういう文化関係の単位はほとんど

取っておりません。まさか民芸館にお世話になろうとは思ってもみませんでした。

皆様もそれぞれの立場でご活躍なのでおわかりでしょうが、このごろの企業というものは、非常にうまくできていると思うんです。日本生命の中におりました時に、不思議と文化の香りを感じておりました、文化の話をしておりましても皆さん場違いという感じがあまりいたしません。私共がよく出張しました時でも、いろいろな文化施設をまわるというスケジュールを会社の上司に報告いたしました時皆さんわりとよく承認がもらえました。私もだんだん齢をとってまいりましたが、全国出張で各支社へまいります時に、皆さんその伝統産業のところへ案内してくれます。焼き物のところ、染め物やさんといったところへつれていってくれます。そういったことで次第に興味が出てまいりました。実は私のおりました日本生命が事務局をお引き受けして大阪日本民芸館というものを運営しているんだということはわかってはおりましたけれど、正直いってあまり関心はありませんでした。しかし全国を出張しているあいだにそういう意味合いが少しずつ理解できるようになってまいりました。そんなある時、私は紀伊国屋書店で柳宗悦全集12巻に《日田の皿山》という文章を見つけました。しばらくその文章を立ち読みしておりましたが、なにかもう吾を忘れて読んだ記憶があります。私が民芸と関わりあいになる一番の文章かと思しますので、ちょっと抜粋してご披露させていただきます。『峠を下りてむらに入れば耳に聞こえるのは水車のひびきである。焼き物の土を砕くのである。音の間はいたく長い。大きな受け箱が少しの水を待っている。急ぐ用もないのである。待ちどうしく思うのは吾々の心だけと見える。だがこのゆるやかな音があってこの窯があるのである。もしせからしい機械が入ってきたら、この村はたちまちつぶれてしまうであろう。機械に職が奪われてしまうからである。狭い谿間は家の増えることすらふせいでいる。早く機械が動いたなら生産過剰にたちまち物が勝てなくなるであろう。この村とこの窯とには待ち遠しい水車が一番仕事を助ける。…云々』という文章に私は現代の時代とその手仕事、大量生産との問題になんとなく惹かれまして早速その本を買って帰り、繰り返し読んで感銘したことを覚えています。

そうしますと私も日田の皿山に行きたくて、いても立ってもいられなくなりました。たまたまその近くに出張する機会がありましたので地図で調べて行ってまいりました。日田というところに晩に入りまして宿の女中さんに話を聞いておきますと、そこは今は小鹿田（おんだ）というのですが…お客さん、それはとてもいいところですよ…朝早く起こしますからいってらっしゃい…ということで一番バス

で山奥へ入っていきました。本当に谷間に落ちそうな道をバスは入っていくのですが村に着きましたら自然の美しさに心がしびれてしまいました。今でも覚えておりますが村の何処からともなく「えー・どーん・うゝー」という水の流れる音が聞こえてまいりました。じっと村で行んだり、あちらの職場を見せてもらったりして一日過ごしました。

私はそういう体験を持ちましてから、その日田の皿山（小鹿田）へ何度通いましたでしょうか…。その内に会社の中で新居君お前民芸館に勤めたらどうだという話しが冗談に酒を飲んだ時に出てまいりまして、それは行けたらいいなァなどといっておりましたら、それが本当の話になりました。前任者の定年で欠員が出来まして、そこへお前が行けということで民芸館にお世話になったわけです。

民芸館に勤めると学芸員の資格が必要です。事務長ですのていらないといえられないのですが、自分がそれではやはり中途半端だなァと解釈しまして、仏教大学の通信教育を受けて資格をとらしていただきました。

そして当然のことながら柳宗悦さんの思想とは何だろうか、こんなに人を引き付けるものは何だろうか…柳宗悦全集を紐解いて読んでいくうちになんで今までこういう機会に巡り合わなかったんだろうかと考えておりました。そして20代10代の早くからこの思想に触れあえたら良かったなァと思うわけです。

ここでちょっと柳宗悦さんについて触れさせていただきます。柳宗悦さんは明治22年生まれで、お父さんは海軍少尉でした。お母さんは講道館創設の加納治五郎さんのお姉さんにあたられる方です。お父さんは柳宗悦さんが2才の時に亡くなられました。柳さんは学習院へ入学され小学部から中学部へ進まれるわけですが、素晴らしい秀才でした。中学の時英語の原書をみな読めたということですから、小さい時からたいへんな語学力を持っておられたようです。かつてNHKで柳さんの小学校時代の作文が披露されたことがありましたが、それは素晴らしい名文です。私は教育ということが大変大事だということをつくづく思います。

当時の学習院は一流の先生方をそろえておられました。柳宗悦さんのドイツ語の先生は西田幾太郎です。それから英語の先生は鈴木大拙。そういうそうそうたる哲学の先生方が若いころ学習院で教鞭をとっておられたのです。そういう時に柳さんはいろいろな先生から影響を受けられたのですが、その中で服部先生との出会いがあります。服部先生というのは終生柳さんが尊敬された先生ですけれども、この服部先生というのは英語の先生ですが非常に生物学がお好きで、子供さんをよく群馬県の赤城山へつれていっておられます。柳さんも先生につられて何泊もしながら山登りをいたしました。いつもその服部先生のことが柳さんの文



献の中に出てまいります、こういうことを書いておられます。服部先生を偲ぶ原稿ですが、『私たちは先生からいろいろな教えを聞きましたが、赤城にてある日先生が美しい湖水を眺めながら私にいわれた一つのことを今でも忘れることができません。私はいつも自然が人間に対してあまりにも清すぎるようにさえ感じると…。汚れた人間の行為の周囲に、こんなに美しい自然があるとは実にもったいないではないか…。ということをつつも子供さんに話しかけられた。』そういうことを柳宗悦さんは非常に明確に心にしみ込む言葉として記憶しておられるわけです。その後の柳さんの人生を歩む一つの動機づけといえますか、別れ目にこの服部先生の言葉が強く影響しているように思われます。

その後学習院から東京大学へ進まれますけれども学習院時代の仲間と白樺派の雑誌を発行していかれるわけです。この白樺派というのは武者小路実篤とか志賀直哉とか岸田劉生といったそうそうたる大正時代の文芸復興の仲間とお仕事をして行かれます。その時にも柳さんは宗教哲学の論文を発表しておられます。東京大学では心理学を研究しようと思われたそうですが、心理学の方へは入らずに宗教哲学の方を志すようになります。この宗教哲学のほうに入っていく中でその柳さんが最初に書かれた『人生の科学』という書物がありまして、私は何度も読むのですがその時柳さんは「順生涯」ということをいっておられる…人間というものは心のよりどころというものをしっかり持って、健康に気を付けていけば100才まで生きるものだ…そのことを全うする人間というものが素晴らしいのだということ、縷々学説を引いて述べておられます。そういう中に心理学を研究しようとする人ですから心霊現象なんかに大変興味をもって勉強されていることも記述されています。

柳宗悦さんの民芸というふうなかわりある一つの土壌の、実はやっぱり影響者がいるわけです。ウィリアムブレイクとかホイットマンといった詩人です。昨年上野と東京の日本民芸館でウィリアムブレイク展が開催されました。私も上野の西洋美術館の方で見まいりました。大変神秘的な絵を沢山発表された方です。この方は詩人でもあり画家でもありまた一つの哲学者であるわけですが、その当時は英国の人達から蔑視の眼で見られてあまり世の中に受け入れられなかった一人です。今、英国では、ブレイクを見直そうという動きが盛んでして、いろいろと研究が進められているようです。ウィリアムブレイクは人間というものは自然との関わり合いをもっともっと大事にしなければいけないとか、また戦争というものを非常に蔑視して戦争は絶対によくないことだ…ということをつもっているわけですが、そういうことを研究を通して柳さんは学んで行きます。

ご自分でも工芸論を論じるに当たってホイットマンが私

に大変な影響を与えたということを記述しておられます。実は今日私はホイットマンの「草の葉」という詩集を持ってまいりましたが、柳さんは中学の頃この詩集をお母さんにねだって買ってもらっているのです。中学の頃にもうホイットマンというものを知っているわけです。それでずっと勉強しておられるわけですが、まだ中学の頃は自分にどのような影響を与えるかよくわかっていない…ただ深い感銘を受けて読んでいるのです。

その後工芸の道へ入って行かれる時に振り返って、ホイットマンの詩のなかで一番何処が自分に影響を与えたかという記録が残っているのですが、こういう言葉です…。「自分の歌」というところですが『一人の子供がひとつかみの草を私に見せて、草ってなあに？と聞く。その子に何と答えたらよいか、私にもその子以上のことは知らない。』まあ読んでみれば何でもない文章なのですが、これを柳宗悦さんが何編も何編も朗読して覚えて一人で口ずさんでいくと、非常に神秘性というものをを感じるわけです…そしてハッと気がついて草ってなんだろうということに疑問を投ずることが大変大事だと思われるのです。

またホイットマンは人間に対する愛情、自然の平和といったものを自由奔放に歌っておりますが、そういうものを勉強していくにつれて非常に影響を与えられたといっております。

そういう経過をたどりながら柳宗悦さんは朝鮮へ興味を持つようになります。興味を持つきっかけというのは、日本人で当時の朝鮮総督府の、日本でいう農水省でしょうか、治山治水なんかを担当している部門に山梨県出身の浅川さんという兄弟がおられたのですが、お兄さんの方が白樺派の雑誌の愛読者であり、白樺派に興味を持っておられた…そのことで柳さんのもとへ李朝の八面白磁の壺をお土産に持ってこられました。柳さんはハッとしてしばらく言葉が絶えたというほどの感動をおぼえられたということです。この李朝の壺を生んだ朝鮮という国は一体どんな国なんだろうか…という興味から浅川さんの案内で朝鮮に渡られます。浅川さん兄弟の親切な行動と朝鮮人に対する愛情というものを一緒に生活しながらつづさに学んで行かれました。朝鮮のなかで李朝の壺をおどろきのなかで収集してまいります。李朝の壺は収集したけれどそれを日本に持って帰るのではなく、朝鮮のものは朝鮮に残すべきだと朝鮮美術館を作ることを当時の朝鮮総督に提言されて、作られた美術館があります。

その建設資金は柳さんの奥様…たいへんな声楽家でしたが、その方の演奏会で得られた獎金で賄われたというエピソードが残っています。やがて朝鮮のいろいろな工芸品を作ったのは名もない職人であるということに気がつかれて、

日本を見た時に日本にもそういうものがあるのではないかと、今度は日本全国を回りだします。その一番最初に収集されたのが木食上人という仏像ですが、哲学者の梅原猛先生がこの木食上人をこの世に紹介した柳宗悦さんの鑑識眼の素晴らしさ、ものを見る力を激賞して書いておられます。それからもっといろいろなものが今、東京日本民芸館に収まっているわけです。その後民芸という運動を民衆的工芸という名前で進めておられます。今日色々なところで民芸焼肉とか、民芸喫茶とかいう名前が見られますように、民芸という言葉が別の形に一人歩きしておりますのでなんとなく安っぽく聞こえますけれども、柳さんが提唱された民芸論というものは、非常に高遠な一つの哲学でした。

今まで人が気にもとめなかった道具、民器、そういうものの中にも素晴らしいものがある…用即美でいわゆる役に立つ…役にふさわしい居所におさまっているものほど美しい…そしてそれを作ったものは職人さんだということに本当に驚き、またそのことを評価されて民衆的工芸品と名付けてその普及、その紹介につとめ、それに対する一つの美的価値を皆で認めあおうじゃないかという運動が民芸運動なのです。柳さんが集められたものが今民芸館に沢山展示されています。

私も民芸館に勤めさせていただいて初めは正直いってよくわかりませんでした。ある時柳さんの書生をしておられた鈴木しげお先生に「先生、民芸品の良さとは何でしょうか？」と質問をいたしますと、ホイットマンの詩ではありませんが「新居君、僕も柳先生に教わったことは、野の美しい花はやっぱり美しいと認識する心の動き…それを感じる人に、民芸館につとめている君にはなって欲しいなァ…それが感じられるようになったら民芸品の本当のことがわかってくるヨ」といわれました。

初めはよくわかりませんので、朝出勤しまして時間がありませんと展示室のなかをウロウロ歩き回っておりました。私には、決して皆様方を越えるような鑑識眼はございませんけれど、しかしこの頃は非常にいいものはやっぱりいいなァということがわかってくるようになりました。最近は大変いろいろなものが出回っておりますけれど、それぞれにどうしてこういうものがデザインされたのかなァということまで感じるようになってまいりました。鈴木先生に学んで、自分の目の力でどうしてそういうものの良さを感じるように努力したかと申しますと、朝誰もない展示室で、ここに器があるとしますとそのものに向かって話しかけるのです…。声を出すのです…。オマエ、何処カラ来タンヤ…オマエ、窯ノナカデ何時間オクタンヤ…コノ軸葉ハダレガ作クタンヤ…というようなことを話しかけてみましたら、何となく答えてくれるような気がしてまいりました。本当に

しみじみと見て語っていきますと、相手も何となく語ってくれるような感じがしてまいります。まァそんなことで私も皆様と同じように努力をしております。

柳宗悦さんは直感ということを非常に大事にしておられます。知識からものを見る方へ入ると、ああこれはコップだ、あるいは水を飲むものだというふうなところから入っていくものですから、ものの訴える力を受けとめる力が非常に弱くなる…とかねがねいっておられます。ですから品物の名前を書くキャプションを省略しろというようなことまでおっしゃっておられるわけです。しかし今日のような時代ですから、私共もキャプションぐらいは書くようにしておりますけれど、やっぱり目がそういう方になってしまっていて、これは何年に出来たものですか？とか、歴史的なことの質問は出てきますけれど、非常に表面的な観賞に終わってしまっているような気がしてなりません。ただし今は生活の様式が非常に変わってまいりましたので、これがどういところで用いられていたのかということがわからないと意味がないのかもしれませんが、しかしそういうことばかりに目が行って、せっかくの造形の美しさだとか、訴えるものを吸収していただけず帰ってしまわれることが多いように思う今日この頃です。

最後に柳宗悦さんは民芸の運動を通して民芸品というものを世に紹介されたわけですが、柳さんは民芸というものについてご自分もまた反省をされておられます。それは自分がこれは美しい、これは醜い、と分けることが間違っていたのではないかと反省です。

柳宗悦さんは『美の訪問』という本をしたためておられますけれど、この中で『美醜なき美』ということをおっしゃられます。柳さんの一番いいところは仏教の中に美を蘇らせることだというのが、ご自分の晩年になっての心の中のまとめであったように思います。私は民芸館に勤務しながら造形ということについて一つの教訓を得たと思えますが、また私は柳さんの説いておられる他力的な浄土真宗を中心とした、いわゆる念仏の持つ意味というものにこの頃非常に興味を持っておりまして、そんな勉強も少しずつさせていただいております。

大変ざっばくなお話しになりましたけれども、これを機会に、皆様方ぜひ民芸館にも遊びにきていただいて、展示にもいろいろご意見をいただくと有り難いなァと思います。ある意味では、手仕事の良さというものが見直される時代が本当にやってきていると思えますし、また若い人達の中にも、だんだんそういうところへ目をむける方が増えているのではないかと、そんな感想を持ちながらお話しを終えさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

(文責・山崎)

西洋見聞録その2

アメリカのある様式家具群を訪ねて。

館野 羊一

I 背景

1992年は4つのイベントでスペインが注目を浴びる。バルセロナオリンピックに、セビリアでの万国博覧会、そして世界が注目するEC統合に加わるスペイン。そして新大陸発見500年記念の年である。

有史以前南北アメリカ大陸には、はるかベーリング海峡を渡ってきた人々によるのであろう、それなりの文化があった。コロンブスの勘違いで『インディオ』とか『インディアン』とか呼ばれたが、インド大陸でないことが、その後すぐわかり新世界ともてはやされ、征服と略奪、ヨーロッパ列強の侵略地となったのは、歴史の延長の上で、さもある、と頷けるのである。でもそれはメキシコ以南のアメリカ大陸でのことで、北アメリカではすこし事情がちがったようである。

イギリスのプロテスタントを中心とする移民たちは、自分たちで開拓する精神を持ち、その点でスペイン人とはそのちが異なる。かつ産業革命下のイギリス移民は労働下級での生活苦より、新天地開拓に夢が持て、スタートにおいて、近代国家たらんとする背景があった。それとアメリカ中央部の大平原には単に狩猟で生活するインディアンしかなくて、かれらは鉄をも、まだ使っていなかった。さしたる文化もなく、まじりあうべきローカリティーもなかった。ヨーロッパのその時の文化を単純に移設出来たのである。特にイギリス人を中心としたアメリカの初期は、広大な国土開拓の時期、とくに1848年のゴールドラッシュによる西海岸への一気の開拓。そして1869年には大陸横断鉄道の開通などにより広大な土地が一つの国家圏ようになっていく。

アメリカは初めから長距離交通を必然として生まれた国で画一的に発展したので、ヨーロッパのように街道ごとに



家具博物館・外観

異なる文化が鎖を繋いでいるのとは、開拓以後の成長が異なるのは当然であろう。

やがて、南部を中心として、原材料生産をして輸出し、北部は工業力のめばえを加速させ、第二の産業革命といわれる大量生産方式の巨大生産力を持ち、世界の近代資本主義リーダーとなってゆくのである。

このようにアメリカをみる時、ヨーロッパの文化を純粹に移設できたこと。その時の近代化をも純粹に移植してかつ、理想的に発展させたこと。このことがモダンデザインの中心をアメリカが取り得たわけになる。

さて近代デザインの歴史はここではふれないが、様式家具を研究するにあたってアメリカは、あまり参考にならないのでは？とかねがね思っていた。

1991年6月、社内でアメリカクラシック家具の輸入の調査に派遣され、この疑問を持ちつつ各地を回る機会に恵まれた。正直言ってこの疑問は帰国しても残っているが、考えを改めなくてはいけない宿題もふえたのである。それは

- 1.クラシック家具の変遷は人間の生きざまに深くかかわる。ということ。
- 2.新天地だからこそ、父母の国の家具を大切にしつつ、その風土で作れる変身を少しする。ということ。

アメリカ東海岸の旅はインテリアを学ぶものにとって、イームズ、ミースファンデルローエ、サーリネン、などの近代デザイン家具は勿論、あまり注目を浴びない、移民の人々が大切に持って来た父母の国の家具にも会える。そのスタイルを見る時、彼らが郷愁を感じた様子を垣間見ることが出来、民衆やフロンティアが何をもって故国と感じたか？は、私たちにとってアメリカとその故国ヨーロッパをより理解するうえで大切であると思うのである。

コロニアル様式とは、アメリカ合衆国の植民地時代の建築を言う。したがって地域により相違するが、概してそれぞれの移民の出身地の建築様式を簡略にしつつ、新大陸の風土を適合せしめたもの、と言える。(共立建築辞典より)



家具博物館・内部展示

II コロニアル・ウィリアムズバーグに家具博物館を みる

ウィリアムズバーグは、『18世紀のウィリアムズバーグの人々が住んでいた環境を正確に再現し、アメリカの理想と文化の発展のためにこれらの初期のアメリカ人たちがいかに貢献したか、そのありさまを次世代の人々がまのあたりに感じ取ることができるようにする。』…この考えで、1926年ジョン・D・ロックフェラー・ジュニア氏が復元と保存を決意し、資金と個人的貢献を推進した。

植民地ウィリアムズバーグの史跡保存指定地区は175エーカーであり、18世紀、19世紀初期の建築物でオリジナルのまま現存しているものは88件あり、それ以外の老朽化したものでも、元の土台の上に再建されたものである。

総督宮殿（ガバナーズパレス）はイギリス総督の権威が表現された興味あるインテリアであったが、なにか手を抜いたというか、おおらかなごった煮なる室内に感じた。あるもの、持てるもののみで構成されていて、とくに大理石はほとんど使われていない。

木部はふんだんにあり、造作の大部分が木製である。床も無垢木で壁は漆喰塗り。外壁はレンガ積みや木の鎧ざりである。石積みは見られない。家具はヘッベルホワイト風やら、チップデール、チロルの山荘風のものまで、まるでヨーロッパからいろいろあつめ、少し素材感のあるものを選んだ、そんな感じであった。

造作の木部は生地仕上げのマホガニーかウォールナット色もあるが、薄い黄色や、ベージュ、グリーンなどのペンキを塗ったものが多い。不思議とクロス貼りはすくなく、あるいは気候的になんらかの理由があったのかもしれないが、イギリス、パリの織物のさかんな時代背景から考えても、やや手抜きを感じた。もっともサミットを開いたウィリアムズバーグインは、近年のリプロダクトされた家具でコーディネートされていて、いい雰囲気の様式インテリアであった。

ウィリアムズバーグ博物館の家具コレクションは点数で

は少ないけれど、その時にあった家具道具、治具を見て、そして家具を分解してあるモデルもみれて、やはりスキルがあったと感心したものである。つまり手作りであり、くり面も鉋がけでの製作であり、木工轆轤はなんとかあったようであるが、引出の組手もアリ組み手で、それ以上の機械はなかったようだ。

こんにちは、われわれも今のアメリカインテリアデコレーターと付き合うことがある。前から彼らのデコレーションは素晴らしいが、なにか古典素材で、ごった煮風だと感じていたが、これはこんな歴史によるものではないだろうか、と思っている。

日本人が洋式インテリアを設計するとジャポニズムが自然と出て、外人がエキゾチックに感じるらしい。世代継承を繰り返しアメリカも、もう父母の国、イギリスとは思っていないのかもしれない。それよりも外国の伝統あるイギリスと見ているのではないだろうか。気候の違いもあり、ましてシカゴを中心としてスタートダッシュを切った近代建築のガラス張りの外観、鉄骨構造からくる超高層ビル空間は画一的であるがゆえに、先人の匂いのするアンティーク風味を求めると、超近代的、機能的モダンデザインになるかの、いずれかであったであろうことは容易にうなずけるのである。

こんにちは、イタリアのデザインが世界のデザインリーダーのひとつの核でありえるのは、アメリカが合理主義を引きずっているため、ふざけた、気軽な人間復古の意味での、イタリアのようなニュールネッサンスを発想しえないのではないか？とも思ってみた。

このように歴史を振り返ってアメリカを見ると、やはり随し味という点では、日本人の深味やデリカシーには答えてはくれないだろう。アメリカ人には工業製品や飛行機、また、ミサイル他の武器などを作ってもらい、ユーモアのあるデザイン、人間の深みに答えるデザインは歴史のある国が頑張るといふ、このようなことが順当だとも考えた次第である。

ウィリアムズバーグでこのような視察を終え、リッチモンドの空港から黄昏のニューヨークに飛んだ。翌日、ファーストファイナンシャルセンターのガラスアトリウムで巨大なウエディングドレスを見た。薄紫のレースで出来たこのウエディングドレスは100メートルはあろうか。誰の婚礼衣装かと思ったら、なんと『自由の女神』のものだという。では誰のもとへお嫁に行くのか、と思ったら誰だと思えます？なんとバルセロナの港で西の方角を指さすあのコロンブス像との結婚のためだそうである。アメリカ人も、いいユーモアがあるものだと、感心した次第である。

改めて考えてみればなぜ、『自由の女神』がフランス人からアメリカ人に贈られたのだろうか。当時フランス、イギリスは仲が悪く、かつフランス革命はアメリカ独立戦争での協力のため民衆が貧困であって、そのためもあってマリーアントワネットのいるベルサイユ宮殿に攻撃を始めたと聞く。母なる国イギリスからはどんな贈り物を買ったのだろうかと思う。アメリカ人はフランスを友人と思い、フランス人は独立の民衆アメリカ人を友人と思い『自由の女神』を贈ったのか。

こんどフランス人は日本人に新しい『自由の女神』的なものを贈ってくれるそうである。巨大アーチのモニュメントだそうで、淡路島に建つ。堺市にも高層ビルが建ち始めれば、大阪湾がまるでハドソン湾。そう、まるでニューヨークのようだね。

いずれにしても、様式家具の研究には、やはりヨーロッパに行こうと思った。

終わり



オラトリオ《ダヴィデ王》の大阪初演！！

— “堺フロイデ合唱団” が市民会館で—

桑原 正嗣



1991年8月7日は、堺の数少ない音楽会の歴史に輝かしい道標を残す、記念すべき日となった。夕刻7時前、市民会館大ホールは、“堺フロイデ合唱団”が中心となって大阪初演する、オネゲルの交響的オラトリオ《ダヴィデ王》を聴くために集った人びとで2階席までぎっしり埋まり、開幕直前の期待と緊張に満ちた空気につつまれていた。

《ダヴィデ王》は、“フランス6人組”の1人、アルチュール・オネゲル（1892～1955）が1921年に作曲した、1時間におよぶ大作である。旧約聖書に登場するイスラエルの王、ダヴィデの劇的な生涯を描くこの作品は、当初、劇の付随音楽として作曲されたが、その後語り手と独唱・合唱・大管弦楽のためのオラトリオ形式に改められて成功を収め、若きオネゲルの名を一躍世界に知らしめるところとなった。

オネゲルは、ノルマンディーの港町、ル・アーヴルに生れたが、両親はチューリッヒの旧家の出身であった。パリで活躍した彼も、スイス国籍の敬虔なクリスチャンだった。この彼の血が、同じ“フランス6人組”の他の作曲家と異なり、ゲルマンの骨太な構成力とラテンの明晰な抒情とが混在する、独自の音楽を形成させていったのであろう。

オネゲルの交響曲やオラトリオは、重厚なハーモニーと尖鋭なリズムをもち、内省的でベシミスティックな気分満ちているが、その中に、スタンドグラスを通して射し込む一条の光にも似た、美しいロマンティシズムの輝きをみ



プログラム表紙

せている。そこには、マチスやデュフィと肌合いの違うルオーの、あの宗教的で自省的な厚塗りの油絵との相似性が感じられる。

話は脇道にそれたが、当夜の演奏は“初演”にふさわしく、熱のこもった感動的なものであった。

ステージの中央には、東千恵子（ソプラノ）、大橋ゆり（メゾソプラノ）、林誠（テナー）という錚々たる独唱者諸氏、それを取り囲む関西フィルのメンバーの後に、“堺フロイデ合唱団”と協演の男声合唱団“コールシャンテ”が立ちならぶ。語り手の俳優、鈴木瑞穂氏が舞台の袖にひかえ、N響正指揮者の外山雄三氏が足早やに登場する。

これまで、意欲的に内外の現代音楽を紹介して来た外山氏の明快精緻な棒さばき、要所を引き締める鈴木氏の朗々たる語り、ノースコアの合唱団も正確な歌唱を響かせ、オケもそれに応えて1時間におよぶ大曲をドラマティックに盛り上げていった。

それにしてもこのホール、音響効果はいうまでもなく、施設全体の不備、老朽化も相当なものだ。80万の人口を抱え、政令指定都市を目指す“堺”の文化レベルが問われるところではなかろうか。

主婦やOLなど女声優位のアマチュアコーラスとして、初めて《ダヴィデ王》に取組んだ“堺フロイデ合唱団”にとって、現代音楽特有の意地悪い不協和音を呪い、突き刺さるリズムに泣いた、苦しい練習の数ヶ月だったと思う。大阪初演もさることながら、今年流行りのモーツァルトなどではなく、同時代の難曲に挑戦した快挙に大きな拍手を送りたい。

ピカソやダリは当然のこと、ウォーホルのポップアートやクリストのアンプレラ・プロジェクト、南華^{ナンバ}＝白^{ハク}のビデオ・パフォーマンスまでも話題となる造形の世界にくらべて、20世紀の音楽は、70年前に生れた《ダヴィデ王》でさえも“現代音楽”と呼ばれて、いまだに多くの人びとに距離をおいているといえよう。

“堺フロイデ合唱団”が、これからも、われわれと同じ時代を呼吸した、ブリテンやオルフやブーランクなどの美しい合唱曲を採り上げ、その演奏を披露されることを心から待ち望むしだいである。 (1991・9・20)

刃物デザイン・モニュメントコンペ 入選発表

平成2年10月、堺刃物イメージアップ推進協議会が募集した「刃物デザインコンペ'90SAKAI」には全国から188人、244点の応募があり、平成3年1月入選作品が決定、2月10、11日じばしん南大阪で開催された「堺刃物まつり」で表彰・発表されました。

グランプリは『PT-DeBe』貞島次良さん（枚方市）が獲得、金賞には『キッチン・カッター・ブライヤー』久保田堅吉さん（貝塚市）・『イルカナ이프』『フィッシュナイフ』角野浩三さん（熊野市）のお2人が、そして他優秀賞として6点が受賞しました。

また「刃物モニュメント」の大賞には、彫刻家の石野耕一さん（豊中市）の作品『風の石-気』が選ばれ、同じく「堺刃物まつり」で表彰されました。実物作品は、南海本線堺駅前広場に、駅前整備工事が完成後に設置される予定です。

要信一さんにホノルル大学より 東洋哲学博士号授与

平成3年5月、SADA会員の長老・要信一さんが、長年研究されてきた東洋哲学論文に対して、ホノルル大学より東洋哲学博士号を授与されました。さる平成3年7月13日には、夕刻より大阪市中央区東心斎橋、O.SEIRYUに於て、ホノルル大学吉川宗男博士ご出席のもとに、その授与式とお祝いの会が開催され、同博士から博士号の証書が手渡されました。

インテリアデザインと哲学とは、要さんならではのなかなかの難解な組合せですが、論文のタイトル「せつやせつ」の内容も、拝読された何人かのお話しでは、遙かに理解を越えて語られたものであると…。

要さんにはますますご健康に留意されて、果てしない挑戦に、ご活躍を期待したいと思います。

 企業が創る

堺に日本初の自転車博物館がお目見え

シマノ工業株式会社



堺に自転車博物館ができるのをご存じだろうか？シマノ工業株式会社が平成3年2月に設立した財団法人シマノサイクル開発センター（岡田素男専務理事）が大仙公園の市有地を借受け、平成4年春のオープンをめざして工事は急ピッチで進められている。市立図書館の横に鉄筋コンクリート

3階建て、延べ1400平方メートルの建物は1階にAVホール、2階は入り口とクラシック自転車の展示、3階は世界の自転車の展示を予定している。

堺は鉄砲鍛冶の伝統をうけつぎ、自転車産業が栄えてきたが、今までこうした施設はつくられていなかった。今回はじめて世界有数のコレクションを持つ日本初ともいえる自転車博物館が誕生する。

このクラシック自転車はもともとオランダの自転車メーカー、パタバス社の博物館のコレクションから139台を9年前に買取り、長年シマノで保管、整備されていた。

主なコレクションは、ドイツのカール・ドライス男爵が発明した足で地面を蹴って走る自転車、ドライジーネ（1817年）前輪にペダルをつけたミショー型（1860年）ダルマ自転車として親しまれている競争用に前輪を極端に大きくしたオーディナリー（1870～1882年）など、自転車の誕生から現在に至る自転車の歴史、現在世界で使われているさまざまな自転車が展示される。きっと堺の新名所になるだろう。

 ズームアップ

堺だんじり祭り

北川 正

地車（だんじり）と言えば岸和田の祭りが有名ですが、堺でも私の出身地など一部の地域では盛大に行われています。

今年も10月5日、6日の両日「ソーリャ、ソーリャ」の威勢のいい掛け声とともに、高さ4メートル、重さ4トンの地車が、笛、太鼓、鉦（かね）のアップテンポのはやしにのって、そろえのハッピと共に勇壮に町内を駆け巡りました。

大屋根、小屋根をもった独特の優美な姿もさることながら、各地車に刻まれた彫刻（ほりもの）も見物人の目を楽しませてくれます。

日が暮れると「灯入れ、曳行」。地車に約百五十個のちょうちんが飾られ、昼とは違ったおもむきに。

本格的な秋の気配のなか堺のだんじり祭りはフィナーレを飾りました。



 堺・今・昔

大小路とシンボルロード

老 健一

堺の古地図を拡げて見ると、市街地のほぼ中央を南北と東西に貫く、際立って広い道が画かれています。西の海から東の奉行所へ向う南蛮人の行列が、珍しい品物や、動物を運んだ道だったのでしょ。この通は古く延文元年(1356)の文章にあるとか、もっと古い文書にもあるといわれ、この大小路の北が攝津で、南が和泉で国境の道である



市小学校壁面(シンボルロードの堺駅寄り部分)
——第二次堺市総合計画概要版より

とも言います。堺というネーミングは、攝津で、和泉、河内の国々の堺にできたことから言いますから、大小路はその中心を成していたと言えましょう。

この大小路に今シンボルロード造成工事が進行中ですが、第三次堺市総合計画概要版によりますと、美しく、ゆとりのある都心のアメニティ空間を整備するためとあります。「堺には顔がない」と日頃よく耳にしますが、シンボルロードが完成すれば、新市庁舎に続く大小路が堺の顔になることが期待されます。快適な空間を多くの市民が散歩される姿は、想像するだけでも楽しいものですが、この大小路の沿線に、人々を呼び寄せる建造物が欲しいものだと思います。例えば種々島の鉄砲が堺の自転車産業のルーツであるという史実や、与謝野晶子を記念する建物があり、季節によってイベントが行われるなど、多くの市民が参加するアイデアのある、シンボルロードであって欲しいものです。森閑とした淋しい道であったり、自転車置場にならないよう、快適な憩いのアメニティ空間となることを願います。

 Eースポット

さつま「地どり亭」

森 和雄

高島屋堺東店前の交差点を渡り、山一証券と東和証券の間の道を西へ50m程行くと赤い看板が目につき、左手奥まった処にぽつんと「地どり亭」が建っています。

まるで駐車場の片隅といったところにある店は、10人も入れば満員といった感じで、夕暮れ時には立って待つ人も見かけます。それだけに味の方もなかなかで、九州から直送の地鶏のさしみからモツ料理にいたるまで、たっぷり堪能出来ます。お値段の安さもさることながら、主人夫婦が気さくに相手をしてくれますので、お奨めの材料を聞いてみるのもいいでしょう。寒くない季節には店外のテーブルを利用すれば、パリの裏町にも似た不思議な雰囲気も味わえます。

とりの好きな人、サイフの軽い人、寂しい人、陽気な人、皆さんも是非一度どうぞ。

■堺市北瓦町2丁 TEL0722-29-8989



堺デザイン協会第8回総会

- 日時 平成3年5月31日(金)
- 場所 堺商工会議所 ●開会午後6時
- ・岡村事務局長より出席状況報告-総会開催成立を確認
 - ・川崎理事長挨拶
- 議事
- ・第1号議案 平成2年度事業報告及び収支決算報告
高木理事より事業報告
森理事より収支決算報告
老監事より会計監査報告-承認
 - ・第2号議案 平成3年度事業計画及び収支予算(案)
高木理事より事業計画(案)の説明提案
森理事より収支予算(案)の説明提案-承認
 - ・第3号議案 役員改選の件
要信一選挙管理委員長より平成3年3月30日締切通信投票の結果報告(任期/平成3年4月1日~平成5年31日)-承認
理事長 川崎浩
副理事長 金子誠之助
事務局長 岡村筭
総務担当理事 森和雄
事業担当理事 高木外・上野あきら
広報担当理事 山崎晶
監事 老健一・垣村三平
- 閉会 午後7時
- 総会終了後懇親会に移り、来賓の大阪府立産業デザイン研究センター水戸部主幹はじめ創造研究おもしろ集団の皆様も参加されて賑やかに歓談の時間を過ごしました。

表紙の周辺

■阪堺電気軌道

大道筋の石畳の軌道敷をゆっくりとチンチン電車が走って行きます。その車体は様々なデザインされた企業の広告で彩られています。地域に密着した交通手段の為か沿線に

関係のある会社が多く見受けられます。さながら走る「ポップアート広告」というところでしょうか。

以前には車体に花や風景などが描かれた「走るキャンバス」の時代もありました。私はブルーに白い雲と波が描かれた電車が好きでした。ともあれ80年以上の歴史を持ち、えびす町~浜寺駅間を走る府下唯一の路面電車、いつまでも人の生活のリズムにあったその走り続けてもらいたいものです。
(森)

会員ニュース

- 新しい会員をお迎えしました。
正会員/浜一彦さん<浜設計事務所>
賛助会員/松村壽さん<堺市議会>
自己紹介は次号をお願いします。
これでただいま正会員は49名、賛助会員は17名(社)となりました。
- 山崎晶さんの勤務先住所と電話番号が変わりました。
住所/大阪市西区南堀江1-18-4 住友生命湊町MTビル 〒550
電話/06-538-5852(ダイヤルイン)

編集後記

いつも同じ言い訳と詫言を並べるのも能がありません。これが現実だと開き直っておりますが、1年8,760時間が年毎に早く経っていくように感じられるのは、あながち忙しさだけのせいではなさそうで、分裂症的怠け心の出没が年々激しくなっているのだと指摘されれば返す言葉もありません。おかげさまで記事は沢山いただいて取捨選択に嬉しい悲鳴を挙げるほど…なんとか今期中にお約束のもう一冊(13号)を発行させないといけません。頑張ります。(山崎)

会報 SADA 12号
平成3年12月20日

発行 堺デザイン協会
〒590 堺市北向陽町1-1-7 オカムラデザインプロ内 TEL.0722-29-5011

編集 堺デザイン協会広報委員会